

NHK日本語発音アクセント辞典 新版

NHK

# 日语发音音调辞典

NHK放送文化研究所 编

新 版



大连理工大学出版社

NHK

# 日语发音音调辞典

新 版

NHK放送文化研究所 编

大连理工大学出版社

NHK NIHONGO HATSUON ACCENT JITEN SHINPAN

© 1998 NHK (JAPAN BROADCASTING CORPORATION)

Originally published in Japan in 1998 by NHK PUBLISHING(JAPAN BROADCAST PUBLISHING CO., LTD.)

Reprint rights arranged through TOHAN CORPORATION, TOKYO

© 大连理工大学出版社 2004

未经大连理工大学出版社预先书面同意,任何人不得以任何方式复制或翻印本书任何部分的内容。

著作权合同登记号:06-2004年第79号

版权所有·侵权必究

### 图书在版编目(CIP)数据

NHK 日语发音音调辞典 新版 / (日)NHK 放送文化研究所编. —大连:大连理工大学出版社, 2004. 11

ISBN 7-5611-2694-8

I. N… II. N… III. ①日语—发音 IV. H36

原书名:NHK 日本語発音アクセント辞典 新版

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2004)第 038032 号

---

出版发行:大连理工大学出版社

(地址:大连市凌水河 邮编:116024)

印刷:辽宁印刷集团新华印刷厂

幅面尺寸:130mm × 185mm

印 张:39.875

字 数:899 千字

出版时间:2004 年 11 月第 1 版

印刷时间:2004 年 11 月第 1 次印刷

责任编辑:宋锦绣

封面设计:苏儒光

责任校对:颜 冰

---

定 价:68.00 元

电 话:0411-84708842

传 真:0411-84701466

邮 购:0411-84707961

E-mail: dulp@dulp.cn

URL: http://www.dulp.cn

## 序

最近、「日本語が乱れている」という声をよく耳にします。「ら抜きことば」や「敬語の使い方」「アクセントの平板化」など、話しことばをめぐる様々な論議があります。

「ことばは生きている」と言われるように、社会の急速な変化にともなって日本語の姿も変わってきました。当然、アクセントや発音も例外ではありません。正しく美しい日本語を守り、後世に伝えていくことも公共放送としてのNHKの使命だと考えています。

この「日本語発音アクセント辞典」が前回改訂された昭和60年は、衛星放送が軌道に乗りはじめ、「ニューメディア時代の到来」と言われていた時期でした。

放送界はその後、デジタル技術の急速な進展により、大きな転機に直面しています。しかし、どのようにメディア環境が変わっても、情報を伝える基本は、ことばと映像であることに変わりはありません。

NHKの放送で使われることばは、多くの視聴者の方々がふだん使う話しことばの一つの基準として、大きな信頼が寄せられてきました。

こうした期待にこたえるため放送文化研究所では、昭和初期から70年以上にわたって、ことばの研究に取り組んできました。

今年で1200回を重ねる「放送用語委員会」では、放送のことばをよりわかりやすく、より親しみやすくするため、外部の有識者を交えて審議を行ってきました。その研究成果を放送に役立てると同時に社会に広く還元するために、いくつかの刊行物を出版しています。その中でも、この「日本語発音アクセント辞典」は長年にわたって最も親しまれ信頼されています。

今回の辞典は、13年ぶりの大改訂になりました。

改訂にあたっては、世の中のことばの変化に対応する一方で、ことばのもつ伝統や歴史を大切に後世に伝えていくことにポイントをおきました。

放送70年の伝統と成果を集大成し、創造力と瑞々しい感性にあふれた放送

のことばの現在の姿を反映させたこの辞典が、21世紀に向けて広く活用されることを期待しています。

今回お届けするこの辞典が、放送に携わる人たちはもちろん、共通語のアクセントを学ばれる方、朗読奉仕に取り組んでおられる方、日本語を学ぶ外国人の方々など広くことばに関心をお持ちの皆様に、これまで以上にご愛用いただけることを願っています。

平成10年春

日本放送協会会長  
海 老 沢 勝 二

## まえがき

NHKの「日本語発音アクセント辞典」は、昭和18年の初版以来、『話しことばのバイブル』として長年にわたって多くの方々からご愛用いただいております。

今年13年ぶりに4回目の大改訂が行われ、21世紀を目前に装いを一新いたしました。平成6年から改訂作業を進め、ことばの発音やアクセントの乱れが指摘されているなかで、共通語アクセントの現在の姿を把握するため、NHKアナウンサー全員と東京・関西の一部民放キー局のアナウンサーを対象にアクセント調査を行いました。また、10数種にのぼる辞典の調査も行いました。それらの基礎資料をもとに、外部の有識者を交えたアクセント辞典編集委員会を8回開き、アクセントの変更や新しいアクセントの採用、収録語などについて慎重に審議しました。

この辞典で採用したアクセントは、現在、放送でもっとも広く使われているアクセントを土台にし、かつ多くの視聴者からも支持されていると思われるアクセントを基準にしています。そして、より使いやすく、より親しみやすい辞典をモットーに編集しました。

新辞典の特色をご紹介します。

### 1. 本文の収録語数は、およそ6万9000語

全体では、旧版より3000語多くなっています。13年ぶりの改訂にあわせて、およそ3500語を新たに加え、現代ではほとんど使われなくなった語を削除して、内容の刷新をはかりました。

### 2. 付録に「Q&A」を新設

日本語のアクセントや発音により親しみをもっていただくために「Q&A」を新設しました。アクセントになじみのない人向けの入門編として、「解説」でより詳しい知識を得たい人の手掛かりとして、10項目を選びました。

### 3. 巻末の資料集の刷新

本文末には、「外国の地名」の項目を大幅に増やして、別立てで掲載しました。資料集の「複合名詞」「国内の地名」については、本文中にそれらの参照見出しを付けて、アクセントを体系的に習得できるようにしました。

#### 4. 「解説」の改訂

旧版の「解説」(金田一、平山、秋永、桜井4氏執筆)に、新しい研究の成果やデータを織り込むなど全面的に手を加えていただくとともに、馬瀬氏には最新の資料や貴重な助言をいただきました。

辞典の編集にあたっては、平山輝男、金田一春彦、秋永一枝、桜井茂治、馬瀬良雄、菅野謙の各氏に格段のお力添えをいただきました。ここに深く感謝の意を表します。

とくに秋永、馬瀬、菅野の各氏は、厳しいスケジュールにもかかわらず、アクセント辞典編集委員会では膨大な資料を検討していただきました。また、部内委員のアナウンサー、調査にご協力いただいたNHK・民放のアナウンサーをはじめ、出版やコンピューター処理などでお世話になった関係各位に心より、お礼を申し上げます。

なお、アクセント辞典編集委員会の委員は下記の方々です。

##### 〈外部委員〉

平山 輝男氏 (都立大学名誉教授)  
 金田一春彦氏 (玉川大学客員教授)  
 秋永 一枝氏 (早稲田大学教授)  
 桜井 茂治氏 (元国立音楽大学教授)  
 馬瀬 良雄氏 (信州大学名誉教授)  
 菅野 謙氏 (大正大学教授)

##### 〈部内委員〉(50音順)

石野 倬、伊藤 文樹、蔭山 武人、加藤 健治、黒崎 めぐみ、  
 小池 保、小堀 信夫、柴田 実、柴田 祐規子、寺田 道雄、  
 内藤 啓史、中川 緑、森中 直樹、山口 勝、山田 誠浩、  
 山本 和之、米田 武

平成10年春

日本放送協会 放送文化研究所所長

山下 頼 充

## この辞典の使い方

この辞典には、日常多く使われることばを選び、その標準的な発音・アクセント、および、それらの“書き表し方”を示し、五十音順に配列した。

また、ガ行鼻音や、母音の無声化の有無など発音上注意すべき点も記して、アクセント辞典であると同時に、日本語発音辞典としても役立つように編集した。

(例)

アンケート、アンケート enquête [フ]

↓                      ↓                      ↓                      ↓

第1アクセント      第2アクセント      原語表記      原語略記

(「ア」の次で下がる)      (「ケ」の次で下がる)

イキスキ、ユキスキ 行き過ぎ

↓                      ↓

母音の無声化                      ガ行鼻音

### 1. 発音について

- (1) 太字のカタカナは、そのことばの発音を示したもの(以下、「発音表記」という)で、したがって現代かなづかいによる表記とは必ずしも一致しない。

例。ガッコー〔がっこう〕、ヒョージュン〔ひょうじゅん〕、カナヅカイ〔かなづかい〕、アルイワ〔あるいは〕

#### (2) ガ行鼻音

カ・キ・ク・ケ・コは、ガ行鼻音〔ga・gi・gu・ge・go〕を表す。

- (注) 外来語(地人名を含む)のガ行音は、原語の発音が鼻音のものを除き、原則として、ガ、ギ、グ、ゲ、ゴで示した。しかし日本語に溶けこんでいるものは、鼻音で発音してもよい。

## (3) チ・ツの濁音

チ・ツの濁音はすべてジ・ズとした。

## (4) 長音

長音は“ー”で表した。これらは、その前の母音の繰り返しと認めて、それに相当する順位に配列した。

## (5) エ段に続くイ

ケイケン〔経験〕、セイカク〔正確〕などのエ段音に続くイは、特に改まって一音一音明確に言う場合には、イと発音されるが、日常自然の発音では長音になる。すなわち、

経験 { 改まった場合は ケイケン  
自然な発音では ケーケン

となる（詳しくは、巻末の99ページ参照）。

これらは、元来、ケイケン、ケーケンと併記すべきであるが、便宜上ケイケンとのみ記載した。

ただし、イの前に、意義の切れ目がある場合には長音とはならない。  
例。ティレ〔手入れ〕（＝て＋いれ）

## (6) シュ・ジュを含む語

シュ、ジュを含むことばの発音表記は、シュクジツ〔祝日〕、アッシュク〔圧縮〕、ハンジュク〔半熟〕、ガイシュツ〔外出〕、ギジュツ〔技術〕などのようにシュ、ジュとした。しかし、その発音については、シ、ジに近く発音することも認められる。

ただし、固有名詞そのほかで、どうしても原音のままで使わなければならないものは注意して発音し、特に、次のような類音語のあるものについては、明確に発音しなければならない。

例。シュッテン〔出典〕→シッテン〔失点〕

イシュツ〔移出〕→イシツ〔遺失〕

トーシュ〔党首〕→トーシ〔闘士〕

## (7) 母音の無声化

○で囲んだところは母音の無声化を示した。元来、母音の無声化は、一定の法則のもとに行われるものであるが、発音の明確さを必要とする場合には必ずしもそのとおりにはいかない。つまり有声音になることがある。そこで、この辞典では、次のような場合の母音の無声化はあえて

表示しなかった(しかし早口で発音する場合には、母音は無声化する。別項、解説中「共通語の発音で注意すること」第1章「母音の無声化」227ページ参照)。

母音の無声化の表示を省いたのは、次の場合である(次の諸例中...を付したものが無声化記号を省いたものである)。

- a. アクセントの下がりめに来て、あとにハ行音、サ行音が続く場合。

例. エフ〔皮膚〕

ズシ〔駆使〕

- b. 無声化すべきサ行音が、サ行音の前に来たとき。

例. シシン〔私信〕 ズシ、(ズシ)〔鮎〕

スズキ〔薄〕 シサイ〔司祭〕

- c. あとにハ行音、サ行音が続き、しかも意義の切れ目のある場合。

例. ゲンシリョ クハツデン〔原子力発電〕

ト シンタク〔投資信託〕

- d. アクセントに関係なく、語末に来た場合。

例. スパイク spike、スベラカ シ すべらかし

クライマワ シ たらい回し

- e. そのほか特殊な場合。

例. コ コロ〔心〕 カ カル〔掛かる〕 カ タナ〔刀〕

## (8) 外来語

外来語の発音表記は、だいたい一般の慣用に従い、以下の場合には原音に近い発音表記とした。

|                     |               |
|---------------------|---------------|
| {di} {dju}          | のものは、ディ、デュ    |
| {fa} {fi} {fe} {fo} | " ファ、フィ、フェ、フォ |
| {kwa}               | " クア          |
| {ti} {tju}          | " ティ、テュ       |
| {mjəm} {njəm} など    | " ミューム、ニュームなど |

と発音表記してある。

|            |             |
|------------|-------------|
| 例. コンディション | {condition} |
| ファン        | {fan}       |
| クアルテット     | {quartetto} |
| パーティー      | {party}     |

アルミニウム (aluminium) (文字表記は「アルミニウム」)

ただし、すでに発音が固定している語はそのままの発音表記とした。

- 例. チップ [tip]  
 グローブ [glove]  
 ラジオ [radio]  
 バイオリン [violin]  
 ウイスキー [whisky]

#### (9) ( ) 内の発音

かつこの発音は、放送では〈許容〉として認めたものである。

例. サッキュー、(ソーキュー) 早急

また、標準音としての順位を決めかねる発音もあり、これらは、それぞれの項に併記した。

例. シュリューダン、テリューダン (手りゅう弾)

テリューダン、シュリューダン (手りゅう弾)

また、かつこの中に、接頭語「お」、接尾語「さま」などを添えた形を入れ、それにアクセント記号を付けたものがある。これは「お」「さま」などを付けるとアクセントが変わる場合である。

例. コゴ下、(オゴコト) 小言 (お～)

カンノン、(カンノンサマ、カンノンザマ) 観音 (～さま)

#### (10) ～(省略)

一つの語に二つ以上の発音がある場合に、～の記号で省略記載した箇所もある。

例. カクテントー、カクテントー、カク・テントー、カク・テントー、キャク～も 主客転倒

これは、シュカクをシュキャクに変えて発音してもよいことを示す。その場合も、発音・アクセントともに変わらない。

#### (11) 複合名詞の参照見出し

複合名詞、複合した地名は規則的なアクセントを持っているので、巻末の資料集にまとめた。引きやすくするため、本文中に参照見出しを約700語加えた。

例. …アイテ (…相手→付P.30)

…イケ (…池→付P.15) [地名]

## 2. アクセントについて

### (1) アクセント記号

発音表記の上の横線——は、その語のアクセントを示す。すなわち、横線の部分は高く発音され、横線のない部分は低く発音される。また、横線の最後の部分が「」になっている場合は、その次の音が下がる。また、終わりの部分が「」で終わっている語はいわゆる平板型のもので、次に来る助詞も下がらない。

例、ハシ〔橋〕ハを低く、シを高く（次に来る助詞は低くなる）。

ハリバコ〔針箱〕ハを低く、リバコを高く（次に来る助詞は、リバコと同じ高さで続く）。

また、この辞典に掲げたアクセントの型は、名詞は原則として単独に発音した場合のアクセント、動詞・形容詞などは終止形のアクセントである。名詞に助詞の付いた場合や、動詞・形容詞などの活用形のアクセント、および数詞・助数詞のアクセントについては、解説中の「共通語のアクセント」（174ページ）、および「数詞・助数詞の発音とアクセント」（223ページ）を参照されたい。

### (2) 複数アクセント

一つの語について、2種類、またはそれ以上のアクセントを示している語は、共通語アクセントが2種類またはそれ以上あることを示しているわけであるが、この場合には共通語アクセントとして、よりふさわしいと思われるものを先にした。

### (3) ( ) 内のアクセント

かっこ内のアクセントは、放送では〈許容〉として認めたものである。

例、アイカギ、(アイカギ) 合いかぎ〔鍵〕

アイフダ、アイフダ、(アイフダ) 合い札

アクヌギ、アクヌギ、(アクヌギ) あく抜き〔灰汁〕

アマギ、アマギ、(アマギ) 雨着

また、伝統的なアクセントは、かっこ内に、「伝」を付けて示した。

例、アカトンボ、(伝 アカトンボ)〔赤蜻蛉〕

ナマヤサジイ、(ナマヤサジイ)、(伝 ナマヤサシイ) なまや

## さしい《生易》

## (4) 中点「・」

熟語などの中には中点「・」を付けて載せたものがある。これは発音・アクセントの区切りのある語である。

例. キラ・ホシノゴトク きら星のごとく

## 3. 各語の表記について

発音表記以外の部分の表記は、NHK編『新用字用語辞典』（昭和56年9月発行）の文字づかいに従った。

## (1) 複数の発音がある表記

二つあるいはそれ以上の発音のある語の表記は、原則として、1番目に記した発音に合わせた。

例. ウスキミ、ウスッキミ 薄気味（～悪い）

ウスッキミ、ウスキミ 薄っ気味（～悪い）

## (2) 使わない漢字

〈 〉内の表記は、原則として使わないが、参考のため載せたものがある。また発音表記が、ひらがなに置き換えられるだけのものは、ひらがな書きを省略したものがある。

例. カレン かれん〈可憐〉

アー 農、脳、能〈膿〉（ひらがな書きを省略したもの）

アイサツ〈挨拶〉（                      ”                      ）

## (3) 外来語の表記

a. 外来語・外国語の場合は、その言語名を〔 〕に示したが、英語の場合は省略した（16ページ「略語表」参照）。

例. 〔フ〕……フランス語 〔ド〕……ドイツ語

〔中〕……中国語 〔ロ〕……ロシア語

b. 外来語・外国語でその語の一部が省略されたもの、および発音が原語から著しく離れたものは、（ ）に入れてその原語を示した。

例. セビロ 背広 (civilian clothes)

デパート (department store)

c. 外来語・外国語をカタカナで書く必要がある場合には、NHK編『外国語のカナ表記』の原則に準拠した。

## (4) 漢字の使い方

漢字は原則として「常用漢字表」(昭和56年10月1日内閣告示)にある漢字と音訓の範囲内で使った(以下これらを「表内字」「表内音訓」と名づけ、それ以外のものを、「表外字」「表外音訓」と名づける)。

ただし、特殊の分野で慣用として固定しているものは、表外字、表外音訓を用いた。

例. 格天井、弥生式土器、長唄、歌舞伎、浄瑠璃、常磐津、関脇、  
枢機卿、黄綬褒章

## (5) 漢字の書き換え

表内字、表内音訓で書けないものは、次の方法で書き換えた。

a. 「同音の漢字による書きかえ」(昭和31年7月5日国語審議会報告)で書き換えが明示されているもの、またこれに準ずるもの。

例. 月食《蝕》、総合《綜》、連合《聯》、車両《輛》、保母《姆》、世論《輿》、畑《畠》、糸口《緒》、思う《想》

b. 書き換えの慣用がないものは全体をひらがなで書いた。

例. じゅうたん《絨毯》、さんご《珊瑚》、つりひも《吊紐》

c. 次のようなものは、漢字とかなの交ぜ書きにした。

①その部分を漢字で書いた方がその語の意味を理解するのに役立つ場合。

②漢字とかなの交ぜ書きの慣用が強い場合。

例. 胃がん《癌》、失そう《踪》

d. 「～然」「～如」の語については、次のように書いた。

イ. 「～」が表内字、表内音訓のものは漢字で書いた。

例. 敢然、巖然、依然、欠如、突如、躍如

ロ. 「～」がかなにすると2字以上で、表外字、表外音訓のものは、「～」だけをひらがなで書いた。

例. りょう然《瞭》、がく然《愕》、ごう然《傲》

ハ. 「～」がかなにすると1字で、表外字、表外音訓のものは、全体をひらがな書きとした。

例. あぜん《啞》、がぜん《俄》、きぜん《穀》、ぶぜん《慄》

## (6) かな書きの語

次のようなものは、原則としてひらがなで書いたが、例外も多い。

## a. 代名詞

例. これ、それ、どこ、だれ、わたし、いずれ、おのおの…など。

例外. 私(わたくし)、僕、君、彼、彼女、お前、自分、皆さん…など。

## b. 連体詞

例. この、その、こんな、いろんな、いわゆる、あらゆる、ある、わが、とんだ、いかなる、きたる…など。

例外. 大きな、小さな、当の、至る…など。

## c. 副詞

例. やがて、ともに、わりに、まったく、もちろん、たぶん…など。

例外. 必ず、最も、少し、直ちに、重ねて、絶えず、初めて、夢にも、特に、実に、無論…など。

## d. 接続詞はすべてひらがなで書いた。

例. しかし、また、すなわち、ただし、および、ならびに、したがって、ところが、おって

## e. 助詞など

例. くらい、だけ、ばかり、ほど、まで、～について、～によって、～において、～にかぎり、～のとおり…など。

例外. ～に関して、～に対して、～に際して…など。

## f. 助動詞、補助動詞などは、すべてひらがなで書いた。

例. ごとく、たい、べき、ようだ、ない、～ている、～ておる、～にすぎない

## g. 接頭語、接尾語

例. お～、ご～、おん～、ふ～、ぶ～、～ども、～たち、～ら、～など、～め、～じゅう、～ぶる…など。

例外. 不得手、無愛想、世界中、～等…など。

## h. 当て字および特殊な読み方をするもの。

例. やはり、めでたい、いとこ《従兄弟》、ふさわしい、きょう《今日》、けさ《今朝》、いつ《何時》、あす《明日》、おととい《一昨日》…など。

## i. 擬態語(擬音語で音をまねている感じの薄れたものを含む)

例. きらきら (～光る)、かんかん (～照りつける)

- j. 外来語のうち、ひらがなで書く慣用の強いもの。

例. たばこ、かつば、きせる、さらさ

- k. 宗教関係の固有名詞や専門用語で通俗化しているもの。

例. ぼさつ、だるま、いだてん走り、ぼだい、ついな

#### (7) カタカナ書きの語

次のようなものはカタカナで書いた。

- a. 擬音語 (音をまねている感じの強いもの)

例. ガンガン (～鳴る)、ドンドン (～鳴らす)

- b. 俗語・隠語の類でカタカナで書く慣用の強いもの。

例. インチキ、ピカー

- c. 専門用語などでカタカナで書く慣用のあるもの。

例. シテ、ツレ、ワキ、ト書き

- d. 表外字、表外音調のためかな書きになる語のうち、カタカナで書く慣用の強いもの。

例. フッ素、ヤ金

#### (8) 漢字の字体

漢字の字体は、「常用漢字表」で示された字体を使った (以下この字体を「新字体」と名づける)。

- a. 次の ( ) 内のような字体は新字体ではないから使わない。

例. 回 (圀)、協 (恊)、興 (興)、師 (师)、職 (職)、銭 (戈) 第 (才)、  
点 (卓)、働 (働)、喜 (喜)、臨 (臨)、留 (留)、歴 (歴)、国  
(口)、権 (权)

- b. 表外字を使う場合も、その字体の全部あるいは一部が新字体で簡略化されているものは、なるべく簡略化されたほうの字体によることを原則とした。

例. 弥生式土器 (彌)

#### (9) かなづかい

かなづかいは「現代かなづかい」(昭和21年11月16日内閣告示) によった。

#### (10) 送りがな

送りがなは、「送り仮名の付け方」(昭和48年6月18日内閣告示) に

基づいた『新用字用語辞典』の方針によった。

## (11) 動植物名

a. 表内字・表内音訓で書けるものは漢字で書いた。

例. 犬、牛、馬、豚、鯨、松、柳、桃、杉、赤貝、青豆、油菜、大根、大豆、猫、猿、蛭、蛇

b. 送りがなが必要なものは送りがなを付けた。

例. 機織り虫、宵待ち草

c. 当て字や誤読のおそれのあるもの、かなで書く慣用の強いものなどはひらがなで書いた。

例. めだか《目高》、ひらめ《平目》、てんとうむし《天道虫》、みつば《三葉》、はげいとう《葉鶏頭》

d. 表外字、表外音訓を含むものは、表内字、表内音訓の部分もひらがなで書いた。

例. ろば、やぎ、みのむし、どくが、ほうれんそう

e. 次のようなものは、漢字かな交じりとした。

イ. 一般的な固有名詞などの付いたもの。

例. 朝鮮にんじん

ロ. 「～菌（きん）」、「～貝（かい、がい）」、「～鳥（ちょう）」の形となるもの。

例. こうじ菌、ほら貝、るり鳥

ハ. 類を表すもののうち、交ぜ書きの慣用のあるもの。

例. は乳類、は虫類

ニ. 動植物の属性（色彩、形状、性質、産地等）を示す語と本来の動植物とが複合したもの。

例. 銀ぎつね、野うさぎ、食用がえる、伝書ばと、甘がき、花しょうぶ、寒つばき、赤とんぼ

ホ. 本来の動植物名に、さらに普通名詞が複合したもの。

例. うじ虫、しいの木、すいみつ桃

## (12) 数字の書き方

a. 次のようなものは算用数字（アラビア数字）で書いた。

イ. 順序・数量などを表すもの。

例. 6・3制、3角形、20世紀